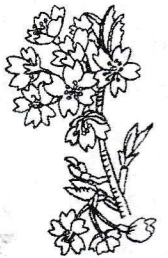


蕾から働き盛りへ

会長 飯田 龍鷹



「人生六十、花なら蕾、七十・八十働き盛り、九十になって迎えが来たら、百まで待てと追い返せ」勝手に五・六・七の歳の位を上げました。皆さんが、そう思っています。教本

岳精流日本吟院

ちよあ

第 1 8 号

平成 1 5 年 9 月
千 代 田 岳 精 会 弘 報

平成十五年度岳精流指標

礼と節

人の巻は浴衣掛けの吟集と宗家が言われる。そうです、人生の夢や希望を盛沢山に積んだ、楽しい正に吟楽の宝船です。長寿世界一を誇る日本、男子七十八歳、女子八十五歳と拔群で、長寿には生き甲斐こそ必須です。さて私共の師宗家は、失礼とは存じますが、盛りを遺憾なく発揮して居られます。詩を吟じて真善美に及び、流統の吟を心情豊かに披露され、魅力に満ちた吟声は、全国大会に、研修会に、記念大会その他の各会に大きく拡がっています。私共の囲みには、この働き盛りの人を結構お見受けします。私の師事した書の石川葉山先生、九十六歳、千葉佐倉から遠く丸の内、小石川そして鎌倉へと徒歩電車で通われ、夕方から弟子一人一人に書の心技を教えて居られます。その縦画横画左右のはらいを書かれる時の筆圧の強さと、しなやかさは、ご指南に与る五十代以上の弟子達を圧倒し、驚愕且つ敬愛措く能わしめずという処です。明治生れの頑固と人間愛を感じています。

先日ある月刊誌で、石井好子さんの随筆「四十一回目のパリ祭」を拝見。著名政治家の息女として正統シヤンソン歌手の花形。その彼女がパ

リ祭コンサート四十一回を八十一歳で迎える。健康に恵まれ、木原選手と水泳で鍛え、老年に入って呼吸法と発声の師に巡り逢えたお陰で歌い続けて来たと言われます。更に来年二月、国際フオーラムで八十人のオケストラと共にアンコール公演をされる。「私は満八十歳、廿歳の青春を四回繰り返して一歳となり、これから又廿歳に向かつて生きて行く」との仏人歌手の言を借り、初心に戻り、歌手の道を歩むと言われます。

日野原重明先生、豊かに老いを生きた。九十一歳、新老人会々長を始め多方面でそれこそ働き盛り、今以て聖露加病院の八階迄エレベータを使わず、二段ずつ上がると言われます。時折テレビでもお話をされます。

テレビと言えば、先日、梅原猛先生出演の「徹子の部屋」を拝見しました。先生は、大病を乗り越えながら、幾多の研究、講演等を行なっておられます。立命館大教授、京都市立芸術大学長、国際日本文化センター所長、日本ペンクラブ会長、文化勲章受賞、そして哲学、宗教活動等も盛んに行なっておられ、著作多数。特に日本の現状を憂え「平和憲法と対になるべき道徳が出来ていない。道徳心のマヒを恐れ、日本は滅ぶんではないかと」授業で教え「此等の仕事を成し遂げる為に生きなければ」とのお話でした。

「礼と節」に徹した一日



今年の大会は好天にめぐまれた。会場へ急ぐ会員さん達も晴々とした表情であった。今年の出番が早い。大合吟へ登壇のため舞台の袖で並んでいる我々の耳にまず届いたのは、総合司会の橋本淳泉（神田）の開会を告げる声、初めての太役ながら、落ち着いて、よく響きわたった。練り上げたプログラムに従い、粛々と進み、地の利もあって当日最大百廿名が磯田副会長の先導で杜牧の「江南の春」アツと言う間に終わったが、全員満ち足りて席に戻る。男子チームが挑戦した合吟コンクールは廿六チーム中、廿が女子。数だけでなく実力も圧倒し、今年も上位を独占。来年こそ男子たる者更に精進して捲土重来を期そう。特別寿栄合吟に男子九人が元気に登壇、益々ご健吟を。特別構成番組はペリー来航百五十年「明治の夜明け」のタイトルで維新の原動力となった先達を、流統を背負う方々の精魂を込めた朗々たる吟、また吟。宗家、宗嗣を始めとする幹部、会長・支部長吟詠、少壮吟士、全国吟詠コンクール優勝者と、高いレベルの吟がぎっしりと詰まった密度の濃

い時がながれた。今年も、ご高齢の宗家はお元気で世相を愁い、日本と国民を愛し、流統への想いは熱かった。豊饒とした「雨にも負けず」が拝聴出来たのは会員として至福の極みであった。三年連続でコンクール係を田園支部と担当、問題点の対応に全力投球の事業部門、神田、ハザマ、鍊水各教場そして特技を請われて担当の他教場の皆さんのお陰で、ほぼ完璧に近い運営であったと宗家を初めとする全体の賞賛を戴けたことを報告し関係各位にお礼を申し上げます。特に今年の指標「礼と節」が全体を通して脈々と流れ、考え方が統一された大会であった事が特筆される。教本と首っ引きの拝聴

清水教場 山口 勝

た。私達の出番は三番目。開会に先立つての楽屋集合のため、開会式は舞台袖からの参加となりました。出場合吟は夢中で、思えば「皆で渡れば」の心境。さて、参加前にプログラムを拝見しますと、課題吟、履修吟以外は初めて目にする吟題ばかり。予め教本の掲載頁を調べ、首っ引きで拝聴しました。この大会を通して特に感じたことは、全国の岳精会が、俗な言い方をすれば「よくもこれだけ、方言でなく標準語で吟ずることが出来るものだなー」と思ったことです。特別構成番組ペリー来航百五十年「明治の夜明け」はさすがに感服した次第です。の皆様のご努力に感謝した次第です。全百三十七曲を拝聴しながら、来年の大会が今から待遠しく思えました。女声上位のコンクール丸の内第二教場 八田 玉泉

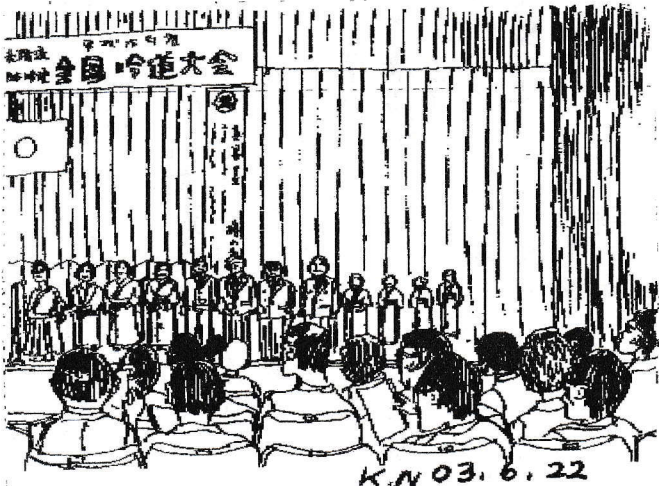
吟力アップと、心を合わせた男の声で上位入賞を目指した合吟コンクールは、悔しいけれど完敗だった。昨年の武道館八位入賞のメンバーで、都合九回という練習を殆ど全員が無欠席で積み重ね、それなりの手応えを感じて、当日早朝の最終声出しをして臨んだが、優勝の砂子、第二位の三河は全てに素晴らしく、水を開けられていた。

終了後「男女別にする」とか「今後は女声でないと勝てない」との声も聞こえたが、これは残念だ。男の声を更に磨いて、弩迫力で差を縮められないか、男には稍苦手で配点の高い詩心表現に専心して、更にプラス出来るものを如何にして身につけていけるか、このままギブアップでは日本男児たるもの（大袈裟）意気地が無さすぎる、と思うのは力みすぎだろうか。

全国吟道大会に参加して ハザマ教場 野中 賢佑

礼に始まり、礼に終わる全国吟道大会が、川崎市で挙行された。まずは会を準備された大勢の方々に感謝申し上げます。私は初めてに参加で、まだ詩吟を教わり始めてから半年しか経っていません。出るのは早すぎると思うけど、まあいいか、外れそうになったら口パクパクでも参加した事に変わりはしない。会場に着くや「千代田は早めの出番。すぐ舞台の方に行きなさい」舞台の袖で待機。時間となり厳粛にそしてゆっくりと始まった。礼に始まりスタートしてついに順番が回ってくる。手に汗が滲んでいる。百廿名の大部隊、さすが迫力がある。客席からどう見えたかな、恐らく最前列だけが見られているのかな。自分達

が終わり、客席で聞くと分かるだろう。やはりコンクールの講評でも、態度の評価を重視。即ちキッチンと立つ、肘を曲げない、マイクの位置を考えて立つ等の評価がかなりのウェイトを占めていたように感じた。声の音域の広さに驚嘆もした。男では手の届かないような七本、八本の響き。全国には上には上がいるものだと、この大会全般を通じて感じた。早くコンクールにも参加出来るように、稽古に励まなければと思う。大会委員長が「一つでも収獲があればいい」とおっしゃったが、私にとっては大いなる収獲でした。又来年も元気に再会出来ることを



野中 賢佑<ハザマ>

全国吟剣詩舞道連盟 吟詠コンクール都県大会

地区予選を勝ち抜いた六名の方が出吟して五月に行なわれた。東日本大会へは、一步及ばなかったものの三部で、林 吾風、城戸稲山、渋谷辰山、二部で橋本淳泉の四氏が日頃の実力を発揮され、堂々の入選と大健闘であった。来年の都県大会はもっと多くの会員が出吟出来る事を期待している。

第一回初期研修会開催

会長が直接新人指導をされる「初期研修」は年間計画で立てられながら、会場確保が難しかったが予定通り七月三十一日、明治生命講堂で開催され、参加者は全教場から七十四名が出席した。

吟題は「徳川家康公遺訓」と「長寿吟」二時間近い熱心なご指導に参加者も熱が入り、最後に指名されて「遺訓」を橋本淳泉、加藤千恵子（神田）が華麗な連吟で、「長寿吟」を遊佐梅泉、中川睦泉（ハザマ）寺沼智泉（清水）が味わい深く独吟して満場の喝采を受けた。終了後、親和部門の肝煎りで、暑気払いを兼ね懇親会が開かれたが、長寿吟そのものの健啖ぶりが発揮され大変な盛り上がりだった。

今年の温習会は深川江戸資料館

この詩は、江南の水郷の春を風の吹くままに ゆったりのどかに豊かな心で、幾つもの川を渡り、あちこち

A black and white line drawing of a flowering plant. The top part shows a branch with several large, five-petaled flowers and some buds. The leaves are elongated and pointed. The bottom part shows a dense cluster of many small, five-petaled flowers, each with a central dot. The leaves at the base of the cluster are smaller and more rounded.

吟は素晴らしいです。大好きです。

謝
謝

朝九時半東京駅発高速バスで鹿島へ、鹿島神宮は武甕槌神を祭神とした神武天皇が自らご即位の年に勅祭された我国最古に類する大社で、武人は戦に赴く前に武運長久を願って参詣した。所謂「鹿島立ち」である。神域は廿万坪、まさに神の森と言える。荘厳な雰囲気醸し出している。地震を起こす大鯨の頭を押さえている「要石」の前で「潮来の夕」を続いて禊齋場「御手洗池」で俳句「古池や」更に芭蕉碑前で「この松の」を合吟して神域を逍遙した。

鹿島神宮を拝辞して、地元有名店「竹やぶ」で昼食。更に鹿島アントラーズのサッカースタジアムを見て健闘を祈りつつ、「かんぼの宿」に向かった。この宿は高台の景勝地に建てられた唯一温泉の出る地元評判のホテル。温泉に浸ってリラックスしてから約二時間、飯田・磯田両先生の前で各々力一杯の独吟を披露し、懇篤率直なご指導を戴いた。暫時休憩後はアルコールを入れ、ホテル自慢の料理をつつきながら余興の数々にうつつを抜かした。

翌十四日、本番「あやめ見物」の船着場に向かう。屋根付のサッパ舟を借り「十二橋めぐり」と相成った。粋な姿の女船頭が櫓と棹を交互に巧に操る。両側堤には地元の人が丹精して育てたあやめの花が咲き競い、我々は酒と唄とに酔い痴れた。十二橋は思ったより狭い連絡橋で、何れも長さ五米位。この舟遊びは一時間で、李白の「江上吟」の感覚とは違ったささやかなものであった。舟を上がり、あやめ園の花菖蒲を見て回った。囂堂は「水郷千里雨に情あり」と唄っているが、田圃に咲く可憐なあやめに朧月をからませて。水郷独特の情景を浮かび上らせている。正に現実の夢路の世界なのだ。華麗と哀愁が漂っていた。

鹿島神宮と温泉の吟とあやめ見物と舟遊び、異色の取合せだった「潮

来浪漫」は、夫々の胸に楽しみ一杯の思いを刻みつけて終わった。（もし、来年の六月にでも潮来に行きたい吟友が居られたなら、私の知っている限りの情報を提供致します）

詩歌研修会 毎回参加三十名を越える盛況

四月より始まった研修会（渋谷辰山リーダー）は参加者が、研究発表という形で毎月開催され、詩仙「李白」の詩を延べ十一名が担当した。それぞれ資料を探し、色々な切り口で解説され、興趣の尽きない構成となり、四回で終了。八月よりは詩聖「杜甫」が取り上げられている。

第一回（四月十五日）
峨眉山月の歌
山口 隆泉
前田 道山

第二回（五月廿二日）
独り敬亭山に坐す
上田 也泉
八田 玉泉

第三回（六月廿六日）
廬山の瀑布を望む
高橋 辰泉
耳塚 昇山

第四回（七月廿四日）
江上吟
大槻 鋒山
清平調詞（一二・三）

第五回（八月廿一日）
山中幽人と対酌す
前田 達也
町田 湧山

第六回（八月廿八日）
晁卿衡を哭す
伴 平風

盛会の詩歌研修会
神田教場 福島 起山

情報は英語で「コトハ」の言葉がありすが、四月からスタートした詩歌研修会は既に四回集まり、「李白」の絶句と人柄を中心にした。毎回、担当者が説明されたが、集めた資料と整理された努力が、一番印象に残りました。昨日まで知らなかった話も沢山ありました。一方参加者は一所懸命、注意深く説明を聴き、本当に充実した会になりました。時に聴く努力のなかに、自分なりに「この点はどうして、なぜ？」と、もう一度自問自答すると理解が一層進むのではないかと痛感しました。詩歌研修会は、私には良い刺激を与えてくれました。

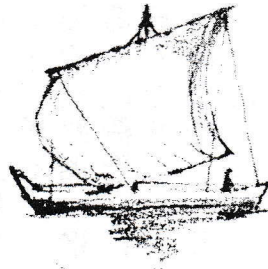
本場に有難うございました。

磯田副会長が「恐らく全国の岳精会（現在廿五ある）で、詩歌の勉強会をやっているのは千代田が断トツでないかな」と云われましたが、私もそう思いました。

私の直感ですが、詩歌研修会が今後益々活発になると、そのうちに、〇〇人物の〇〇の箇所は、千代田岳精会の詩歌研修会に尋ねたら、という声が出てくるのではないかと、秘かに期待しています。

磯田副会長総本部指導本部員に

磯田副会長が、六月十三日付けで岳精流日本吟院総本部指導本部員に任命された。千代田としては飯田会長に次いで二人目となる。
七月十二日の指導本部員研修では、宗家を始めとする諸先生方の吟詠の伴奏を指名されコンダクターで担当された。



演奏担当の コンダクター研修会始まる

会場の調整で、苦勞したコンダクター研修会は、六月廿七日第一回を開催、廿五名の参加であった。
流統内でも数少ないこの様な研修会は、本部指導部でも正しい節調を徹底する点からも興味を示され、荻、町田正副リーダー作成の研修資料が参考に届けられた。各教場自前の演奏体制の確立が目的であるが、温習会での成果発表も楽しみで、励みとなっている。

『新 会 員 紹 介』

◇丸の内女子教場
本多 敦子さん（五月入会）

丸の内第二教場の本多弘泉さんの奥様です。ウグイス嬢をなさる程の高音できれいな声の方です。詩吟を聞いて、吟の深さに感銘を受け、「日本の心」を知りたくての入会です。本数差を超えた「夫婦吟」楽しみです。

◇東陽町教場

金子 千枝子さん（六月入会）

読売川口カルチャーで剣舞『千峰流』家元として講座を持たれ、その道は廿五年との事。詩吟も同所の詩吟教室で宗嗣の指導を受けていますが、更に磨きたいと入会されました。吟友として今後とも宜しくお願いし、華麗な踊りが拝見出来ると期待しています。

金子 忠嗣氏（七月入会）

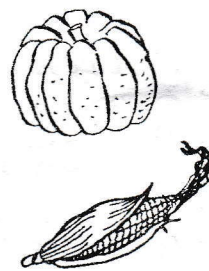
昭和一桁、浅草生まれの浅草育ち、生粋の下町子です。日本ビクタ一のOBで、中小企業診断士。定年退職後は、その手腕を買われ日本橋小船町会で経営コンサルタントとして東奔西走しています。詩吟は初心者とは思えない音感の良さと堂々とした声量で、期待の人です。七十歳。

◇清水教場

武藤 孝氏（七月入会）

自己紹介させて頂きます。私は

昭和十六年浅草生まれ、市川で育ちました。子供の頃から邦楽が好きで、カラオケの選曲にもその傾向が出ています。詩吟とは初めての出会いですが「健康にも良いぞ」との一言で挑戦してみました。いいと思い入会させて頂きました。



十七号の体制改編記事に、記入漏れがありました。お詫びします。

吟楽部門
功刀蒼泉サブ（ハザマ）

編集後記

何か欲しければ、新聞配達等で収入を得る、お手伝いで小遣いを貰う。そんな体を動かして、汗を流す喜びを知らない子供達が何と多い事か。甘やかされ、汗して得る報酬の尊さに思いも及ばない、自己中心的な多くの若年層。中学生と地域清掃をして「働いて他人に喜ばれることが貴重な体験だった」と言うゼネレーションギャップに、親の躰が如何に乏しいか考えさせられ、吾が世代の育児の過ちを反省します。（八田）